

別寒辺牛

2024年11月発行
NO.46

野生のハスカップの調査

お菓子や飲み物にも利用されるハスカップ(正式名称：クロミノウグイスカグラ)は、栽培されているものだけでなく、北海道や本州の一部に野生のものが見られます。

ハスカップという1つの種類の中にも、遺伝情報を含む『染色体』を細胞の中に2セット持つもの(二倍体)と、4セット持つもの(四倍体)の2タイプあることが知られており、道東地域では二倍体と四倍体の両方が自生することが今までの研究で判明しています。

これらタイプの違いは、植物のサイズの変化や進化にも影響を及ぼすと考えられており、ハスカップの品種改良と進化の研究の両方において重要な性質です。

そこで、厚岸町内を調査してハスカップの自生地を探し、タイプ別の特徴を明らかにしました。

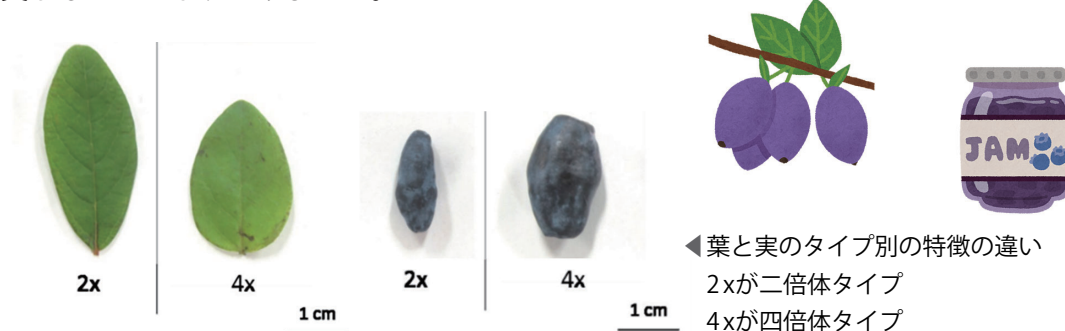
厚岸町のハスカップ

今回の調査で、新たに厚岸町内の4カ所に野生のハスカップがあることがわかりました。そのうち2カ所では二倍体のみが、別の2カ所では二倍体と四倍体が混生していることが確認されました。これまで二倍体と四倍体は別々に自生すると考えられており、同じ場所に2タイプが自生する厚岸町は、ハスカップのタイプがどのように分かれ、広まっていったかを考える上で非常に重要な地域であるといえます。

ハスカップの葉と実の特徴について調べたところ、二倍体は葉と実の両方が四倍体に比べて小さく、細長くなっていました。これらの特徴によってハスカップのタイプを大まかに区別できるようになる可能性があります。

花の特徴については、タイプによらず同じ株の中で、雄しべが雌しべより長くなる花もあれば、その逆の花も一緒に咲くことがわかりました。

また、チライカリベツ川流域の二倍体のハスカップを使って人工授粉をさせる実験を行ったところ、同じ株に咲く花の花粉より、違う株の花粉を受粉させたほうがより多くの実がなることがわかりました。



◀葉と実のタイプ別の特徴の違い
2xが二倍体タイプ
4xが四倍体タイプ

まとめ

栽培されているハスカップは品種改良が行われてきましたが、収穫の効率化のために大きな実をつけるハスカップが求められています。今回の調査では、品種改良に関連する興味深い遺伝資源が厚岸町に存在することが明らかになりました。また、四倍体がどのように生まれたのか、なぜ二倍体と四倍体が混生している場所があるのかなど、さらなる研究が期待されます。

北海道大学の津村美悠氏による『別寒辺牛湿原に自生するハスカップの生態特性と遺伝的多様性の解明』より
報告書などの本文は、水鳥観察館のホームページで見ることができます

別寒辺牛湿原に自生するハスカップの生態特性と遺伝的多様性の解明
〜厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励金の研究事例を紹介します〜

●問い合わせ／水鳥観察館 ☎ 52-5988